

◆分科会コメント④◆

「中国文化とアジア世界の文化共生」研究会報告

並木頼寿

＜東京大学＞

今、ご紹介にあずかりました東京大学の並木です。文化分科会に参加させていただいた者として簡単にコメントを述べさせていただきたいと思います。このようなかたちで私がコメントをするとは認識していませんでしたので、あまり準備のないままに勝手なことを言うかもしれないかもしれませんが、お許し願いたいと思います。

文化分科会では、社会の変化、文化の変化、その両者の関係、外からの影響、さまざまな問題について非常に活発な報告・議論がありました。そのなかで、歴史的長期的理解の必要性、現状の変化についての分析の必要性、さらに内部からの変化の要因の問題、外から加えられる影響がどのように受けられるのかという問題等、多面的な議論がなされました。

そのなかで、私の頭のなかに残って気になっている幾つかの問題点について、お話をさせていただきたいと思います。

1つは小林一美先生の報告です。内容については、先ほど馬場先生がご紹介されました。小林先生は、中国の末端の地方行政を担っている地方の役人が、明・清時代から現在に至るまで、どのような歴史的変遷を遂げてきているのかということについて、任期の問題、何年ぐらいそこにいるのかを通じて大きな流れを紹介されました。

明・清時代には大変短い、中華民国時代にはもっと短い、人民共和国になると非常に長くなるという大変明確な違いが指摘されています。しかし、他方で、強力な政治権力が地方社会をコントロールする力のかけ方、そのための工夫という点では歴史的に共通しています。その歴史的なベースを踏まえたいうでの具体的なやり方は、むしろ発達してきているかもしれないという印象を受けました。

そのときに、長期的な変容を考えた場合に、中央権力が強力であるときに社会が活発であるのか、中央権力が弱体であるときに社会の文化はどうなのかという問題がありました。

私の専門でいえば、清朝末期の中央権力は大変弱体です。「国が滅びる」と言われていました。中華民国の前半の時期、軍閥政府の時期にも、「国が滅びる、分裂する」などと言われ、あまり評判がよくありませんでした。南京政府ができると少しよくなったと考えられます。中華人民共和国になり、いろいろな政治変動があつて、中央が強い、地方が強い、いろいろな時期がありました。

それを比較して考えたとき、中央政府が強いから社会に多様性があるとは言えません。社会的な多様性と政治的な体制との間には違いがあります。その国家的な結合の強さと、社会的文化的な充実感には、ずれがあるのではないかと。それは私の問題点として、これから考えていきたいことの1つです。

その際に、藤谷先生が報告されましたが、辛亥革命という政治的な事件を、民衆の側でどのような文化的なベースのなかで実行していくのかを具体的に検討していくと、上からの政治的

な宣伝ではなく、下の民衆の社会の側からの土俗的、伝統的な力によって、具体的に地方の政治的な事件が起きるといった構造を説得的に説明されました。これは湖南省での辛亥革命の事例です。

そのようなことを見ると、国家の大きな変容の過程が末端の社会でどのように支えられていくのか、ということを考えるのは大変複雑なことをたくさん検討していくことが求められ、大変興味深い課題を考える糸口になったと思いました。

文化分科会では、20世紀前半の変化を主なテーマにする報告と、20世紀後半のごく最近の21世紀にかけての社会変化をテーマにする報告とに、大きく2つのグループに分かれていたといえます。

最近の社会変化について、大きな国家的な変容のなかで、民衆的な世界がどのようなかたちで変化したり生き残ったりしているのかという報告がありました。チベット族の場合のように、中国の社会経済の大規模な変容のなかで、これまで維持されてきた地域社会が崩壊してしまう危機に迫られているという松岡先生の報告。他方、モンゴルの社会について、いろいろな社会変容を通して、過去からずっと続いてきている生産の協力関係が持続的にいろいろなかたちで再び機能を回復しているという高明潔先生の指摘。従来の過去の生産や社会、文化が、今後、どのように受け継がれていき変容していくのか。これも多面的に検討しなければいけない課題であると思知らされました。

過去をどのように見るかということについて、私が大きく気になった2つ目のことは、歴史的な過去を歴史的な過去としてどのようにとらえるのかということです。これは、李長莉先生や周星先生の報告に触発されました。

李長莉先生は、清末から民国の時代の比較的保守的な知識人の日記を克明に読まれて、その人の思想形成について報告されました。そのなかに含まれる伝統的な要素と、新しく吸収した、新しい近代のさまざまな観念や概念などに、大変貪欲に好奇心を持って受け止めていこうとするような姿勢です。保守的な政治姿勢と文化的な好奇心の強さが共存しています。政治行動としては、保守的な行動のほうに振れているという傾向が強いのですが、それを支えている想念の幅は非常に広いということです。

これは、清末の知識人の日記などをほかのケースで読んでいて、大変興味深く感じています。19世紀末から20世紀の初めに、日本人が中国社会にもたらした日本からの近代的なさまざまな情報が、その当時の知識人にどのようなルートで、どのようなかたちで受け止められて、どのように定着したのか、または定着しなかったのか、ということは個別的にいろいろな史料を見ると大変興味深いケースがたくさんあります。そういうことの事例を教えていただいたと考えました。

周星先生は、古い村や町を再構成するような、最近の中国での村おこし、まちづくりなどの現場にかかわる問題を指摘されました。これも過去の歴史を現在にどのように生かしていくのか、または過去の歴史を現在にどのように利用していくのか、そのようなことにかかわる大変重要な興味深い問題だと思います。

そこで再現される過去が果たして過去なのかどうか。これがまた大変興味深いところです。私も中国の歴史的な建造物などが再建されて存在しているものを見学したりするときに、そこで目の前にある建造物の景観は、どの時点のどのような概念の塊のなかで再構成されてできあがっているものなのかと。千年くらい前の遺跡だと言われているものが、私が今接触している

空間が果たして千年前の空間とっていいのでしょうか。むしろそうではないのではないかと考えさせられることがしばしばあります。そのようなことについての新たな知見を得ることができたと思います。

最後は、まとめの話みたいなかたちで終わりにさせていただきたいと思います。先ほどの概念の話とか、歴史的過去と関連して、中国を研究するときの、研究をするこちら側の準備はどうなっているのだろうか、ということが今回だけではなく、しばらく前から気にするようになってきたのかなと思っています。

清朝末期の知識人の日記などを読むと、彼が持っている知識のベースは、私たちがまったく持っていないような非常に膨大な中国の古典に根ざしたものすごい知識の塊があります。それを日々いろいろなかたちで本を読んだり、字を書いたり、その文章をつくったりしながら再確認して身に付けていくわけです。李長莉先生が紹介された人物や、その他、清末のいろいろな知識人、大なり小なり古い伝統的な文化の体系をもち、そのうえで新しいものを受け入れたのだと思います。

私たちは、その古い文化の体系をもたないまま中国の近代の歴史を勉強しているということは避けられません。私は、政治学とか、経済学とか、西洋近代的な学問の方法を高等学校や大学の教養課程で身に付けました。むしろ私にとっての方法は、そういうところにあると言ってもいいのかもしれませんが。そのようなかたちで中国の古代から伝えられてきたさまざまな枠組みに対応するときに、どのようなことになるのでしょうか。

中国学を考えたときに、中国学をどのようなものとして考えたらいいのかと、改めて自分自身考え直してみたいと思っているところです。

そもそも「シノロジー」、「チャイニーズ・スタディーズ」という言葉が19世紀のイギリスやフランスで、いわゆる一般的な学問の体系のなかで個別的な地域研究の用語のようなかたちで成立してくる事情があったように思います。おそらくヨーロッパ人にとっても中国学とかインド学は扱いにくいものだったのではないかと思います。

そのような事情は今も存在しています。中国やインドは、改めて自分たちの方法が普遍性を持っている可能性があるのだということを自己主張する局面にきているのではないかと思います。では、私たちはどうしたらいいのでしょうか。孔子の本をもう一度読むかと思ったりするときもありますが、そういうことをいろいろ考えさせられました。雑駁な話で申し訳ありません。終わらせていただきます。



●司会— どうもありがとうございました。引き続きまして、環境のコメントを榎根先生からお願いします。